

「酒屋」の枠を超え、地域の「困った」に寄り添う

～断らない姿勢が磨く、自己研鑽と地域への貢献～

「酒屋がメインだと言ったはずなのに、見学に来た学生たちの感想文は『人助け』のことばかり……」先日、私の店に職場見学に来た専修学校の生徒たちの手紙を読み、苦笑いしながらも、改めて自らの職業観を深く見つめ直す機会を得ました。

山形県白鷹町で「ヤマシチ商店」を営む私の日常は、単にお酒を販売し、配達するだけにとどまりません。日記を振り返れば、そこには「人助け案件」という名の、多種多様な地域のニーズが並びます。挙動不審な玄関錠の調査、不要になった古いガラスの処分、アコーディオンカーテンの取り付け、さらには IT に不慣れな高齢者の方の LINE 設定や、エラーで止まったファンヒーターの分解清掃……。一見すると、酒屋の仕事とは無縁に思えるかもしれませんが、これらすべてが私にとっては「職業奉仕」の地続きにある活動です。

私の信条は、地域の方々からの相談を「まずは断らずに引き受ける」ことです。ある時、防犯パトロールを共にした元自衛官の方が「自衛隊は自己完結のマインドで動く」と仰っていました。その言葉に強く共感しました。地方の小さな商店もまた、地域という組織の中で、自分にできる最大限のスキルを駆使して「自己完結」を目指す存在でありたい。難しい案件に挑戦し、仕組みを解明して無事に解決する。そのプロセスは、私自身の技術力を高める「自己研鑽」となり、それがまた次の誰かを助ける力へと繋がっていきます。

学生たちが私の話を聞いて「自分もこれからたくさん挑戦していきたい」、「チャレンジ精神を持ちたい」と感じてくれたのは、酒を売る姿ではなく、目の前の困っている人のために試行錯誤する「働く姿勢」に、何らかの価値を見出してくれたからではないでしょうか。

ロータリーの「四つのテスト」に照らせば、私の活動は「真実かどうか」、「みんなに公平か」、「好意と友情を深めるか」、「みんなのためになるか」を、日々の泥臭い作業の中で問い続けるプロセスそのものです。代金が年金支給日まで待つてほしいというお客様がいれば、「お互い様ですから」と笑顔で応える。店を訪れる学生にトイレを貸し、ラーメン屋の場所を教える。こうした小さなやり取りの積み重ねが、地域の信頼という目に見えない財産を築いていくのだと信じています。

私はこれからも、本業である酒造りや販売に誇りを持ちつつ、地域の「便利屋」であり「相談役」であり続けるでしょう。「何でも屋になって、自分が何屋かわからなくなる」と冗談を言うこともありますが、地域の人々の笑顔の先に、私の目指すべき「真の酒屋の姿」がある。この「人助けマグネット」のように、地域にぴったりと寄り添い、離れない。そんな奉仕の形を、これからも追求していきたいと思えます。